

# 新

兵庫大学・兵庫大学短期大学部 広報誌  
Hyogo University Public Relations Magazine

~nagomi~

学長座談会 | 巻頭特集 | 大学が地域に溶け込みながらできること

## ともにめざそう 「誰一人取り残さない社会」

社会福祉法人正久福祉会理事長  
上田 芳史

兵庫大学学長  
河野 真

社会福祉法人立正学園包括施設長  
藤本 政則

vol.13

2021年6月

附属図書館

大学が地域に溶け込みながらできること

ともにめざそう

# 「誰一人取り残さない社会」

● 社会福祉法人正久福祉会理事長

上田 芳史

● 社会福祉法人立正学園包括施設長

藤本 政則

● 兵庫大学学長

河野 真

本学は東播磨地区を中心に、地域に根ざした大学として、多くの方々に支えられながら学生を育てています。特に社会福祉の分野では、学生たちは実習などの教育活動はもちろん、地域の人々とのさまざまな交流を通じて、人の痛みが分かる専門家へと成長していきます。今回は、加古川市、宍粟市などを拠点に社会福祉活動を展開するお二人の話に河野学長が耳を傾けます。

## 地域の中で生きる大学、福祉施設

**河野** まず始めに、皆さんの活動やそれぞれの施設についてご紹介ください。上田さんは老人福祉の分野に携わっておられますね。

**上田** はい。老人福祉施設の本部は宍粟市で開設しています。このほか宝塚市、神戸市と、施設は計3カ所にあり、地域密着で特別養護老人ホームなどを運営しています。

本施設の特徴は、全て住宅地の中、つまり民家の間にあります。入居者さんは、地域の中で暮らしているということになります。すなわち我々は入居者さんも含めて地域の一員なのです。もちろん、地域の祭りにも参加させていただいておりますし、施設で祭りや盆踊りを開催する際には、地域の皆さんにたくさん来てもらっています。前は屋台も出て大賑わいになりました。

**河野** すっかり地域に溶け込んでおられるんですね。それならば、地域との経済的なつながりもあるのでしょうか。

**上田** 地域への経済的還元は大切だと思っています。とりわけ本部のある宍粟市は、経済圏が小規模で、施設に関わる地元の業者さんたちは、取引先であると同時に、お客様でもあります。ですから私たちは、業者さんとの一つ一つの取引を大切にしてきました。

思えば、本部が完成したのは1987年のことでした。民家の間に老人福祉施設ができることに、当時は周辺から反対の声も上がっていました。

**河野** そういう時代だったんですね。

**上田** しかし今では人々の意識も変わり、安心して高齢者を預けられる施設だと信頼してもらっています。

**河野** 施設を運営するにあたって基本となる考え方があるのでしょうか？

**上田** 私たち「まどか園」は、「安心ホットステーション」というコンセプトを掲げています。意味は「あそこに行ったら、うちの家族をなんとかしてもらえ」と思ってもらえるような場所にしたいということ。子どもさんが親を預けて安心して仕事に行ける、また親子がちょっと距離をおくことで、笑顔でいい関係がつかれる、そういう施設をめざしています。家庭の延長ということではなく、ご家族だけでは解決できない、すなわち専門の施設だからこそできることをやろうと考えています。

兵庫大学との提携は、こちらで教鞭を取る先生とのご縁から始まりました。これからも長く、いい関係を作っていきたいですね。

**河野** 地域とのよい繋がりをずっと続けていきたいのは、我々も同感です。一方、藤本さんは児童福祉の分野でご活躍中ですね。

**藤本** うちの園の「立正」の名は、日蓮宗の宗祖・日蓮が記した『立正安国論』にちなんでいます。地元加古川で戦災孤児のための施設を作ったのがはじまりで、以来長年にわたって児童養護施設を経営

してきました。もともとは、家族と一緒に暮らすことができないために入所が必要な子を受け入れてきましたが、虐待、子どもの貧困の問題が増える中、近年は幅広い年齢の子どもを対象とした在宅支援のセンターを運営し、ショートステイも受け入れています。

**河野** 児童養護施設の方は長期滞在型ですね。

**藤本** そうです。それに対して、センターは施設入居に至らない子に対応しています。また深夜や週末でも対応することで、地域や家庭の支援を行なっています。

兵庫大学と立正園のつながりは昔から続いています。長い間、学生の施設実習の受け入れや、卒業生の採用も行なっています。

**河野** いつもお世話になっています。特に実習を通じた地域での学びは、専門職をめざす学生にとって、とても重要なものです。キャンパス外で叱られたり、褒められたりしながら、どんどん経験を積んでいってほしい。そうすることで、彼らは成長していくのです。



## 地域からの支援に恩返しを

**河野** 本学は、地域の問題・課題に挑むプロジェクト学習やインターンシップなど、学外の学びを重視しており、現在40を超える近隣自治体、企業、組織などと連携しています。大学は、私立であってもやはり「公器」としての責務を担っています。地域貢献は我々の使命だと考えているので、教育にあたっては、学生が地域の課題に貢献できるよう、意識して指導しています。

兵庫大学は短大だった時代を経て4年制大学となり、長くこの地で地域の支援をいただきながら運営されてきました。そういう歴史をもった大学だからこそ、御恩返しとして知的資源の還元をせねばと思っています。

現在「地域人材育成プラットフォーム」という取り組みを進めています。これは本学がこれまで地域で行ってきた活動を統合し、専門性を生かした地域の課題解決、人材育成をさらに効果的に進めていこうとするものです。今まで以上の地域貢献ができるよう、学内のさまざまな資源について、統合、整理を進めているところです。

## 「本気」の人間関係が、人としての魅力を磨く

**河野** 上田さんは、老人福祉施設で働く若いスタッフに対して、どんな思いをもっておられますか？

**上田** 若い人々に向けてのメッセージということでは、うちでは新人に「幸せになってほしい」ということを言っています。一人ひとりに、仕事を通じて世界一幸せになってほしいのです。利用者さんを笑顔にすることに喜びや、やりがいを感じながら幸せに仕事をしてほしい。利用者さんの笑顔に喜びを感じる職員は、辞めません。そういう人は利用者さんに対して「さらにこんな事をしてあげたい」と

考える。一生懸命になって楽しんでいるのです。

ボランティアの学生さんがうちに来られたときには、皆さんには「喧嘩してください」と言うのですよ。遠慮して静かに付き合うのではなく、自分の意見を一生懸命に言って、相手の意見も一生懸命に聞く。もし相手を正しく理解していないと分かったら、その場で「ごめん」と言えばいい。大事なものは本気の人間関係です。

**河野** 本気で話し合う事で、本当の意味でフレンドリーな関係ができてくるのですね。藤本さんは、今の若い人に求めるものが何かありますか？

**藤本** うちの施設は資格取得に関連した実習を受け入れる一方で、私自身は兵庫大学の非常勤講師として教壇にも立っています。教員として、また実習受け入れ先として、さらに学生の就職先として、兵庫大生たちに感じるの、みんな素直だな、正直な人が多いということです。彼らと接していると、我々も正直、もっと素直でなければと思います。

現場を知る教員として、専門資格を取得しようとする学生によく話すのは「専門資格は、就職の際の入場切符だ」ということです。この資格があれば、専門家としてのスタートを切れる。しかし、その先はそれぞれが経験を積み、現場の中で成長していかねばなりません。

児童福祉の場で子どもたちから好かれるのは、まず「面白い人」、次に「ダメなことはダメとはっきり言ってくれる人」、そして「いろいろなことを教えてくれる人」です。特に子どもたちの将来にとって大切なのは、いろいろなことを教えてくれる人でしょう。子どもにとっては高い専門知識よりも、生活に関わるさまざまな生きた知恵を教えてくれるという点が大切で、そういう職員は大いにリスペクトされています。

学生さんにはそういう部分がほしいですね。そして、それは児童

養護の世界だけではないと思うのです。学生時代からさまざまな経験をjして、専門知識だけでなく現場で活かせる知恵も身につけてほしい。もう一言付け加えるとすれば、魅力的な人になるためには、勉強だけでなく遊びも大切だと思います。

**河野** 確かに、サークル活動などを通じて仲間との友情を育み、さまざまな人と交流することは大事ですね。私たちの大学でも、学内外での課外活動を応援しています。授業を受けていない時間も充実して過ごすことが、「人間力」、すなわち人間としての魅力を伸ばすことになるからです。また一方で、学ぶことはもちろん大事で、学生には、知識や技能を生涯にわたってバージョンアップし続けられる力、すなわち応用力を身につけてほしいと考えています。

現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響が大きく、学外での活動は難しくなっています。とはいえ、外へ出ることをやみくもに拒否するのではなく、正しく恐れの上で、慎重に行動してほしいのです。大学時代には期限があります。だから、今がどんな時代であっても工夫をして、経験値を高めていってほしいですね。

本学では、学生たちの取り組みにできるだけ注目し、頑張っている学生に対しては、大学から年一回表彰を行なっています。学力、クラブ活動、社会活動など、さまざまな面をとらえて頑張った人を讃え、公表しています。また、就職活動での頑張りや、専門職として社会で活躍する卒業生の姿も、後輩にできるだけ伝えるようにと考え、学科ごとの取り組みになりますが、先輩の頑張りを紹介する場を設けています。後輩の励みになることでもありますから、先輩と後輩が交流する場はできるだけ多く設定しています。

また今後は、学生同士での支え合いを促すため、ピアサポート制度の整備を進めます。ピアサポート制度とは、先輩が後輩をサポートするとともに、同級生同士で学び合うなど、学生たちがともに学びを高めることができる仕組みのことで、この制度を作ることで学生間の縦、横のつながりをもっと強められることを願っています。

## 福祉の現場から、兵庫大学に期待すること

**河野** ここで改めて「兵庫大学に何を期待するか」を二人にお聞きしたいと思います。

**上田** 大学への期待について申し上げるなら、兵庫大学が「人づくり」に力をいれておられるのは素晴らしいことだと思います。もちろ

ん、大学は第一義的に専門教育、研究機関なのですが、専門知識だけで社会に貢献できるかどうかといえば、それには疑問符がつきます。特に福祉の仕事は対人サービスなので、知識、技術だけでは成立しないところがあります。

福祉施設で働く職員の方々には、「気を配れる人」になってほしいと思っています。周囲の人をよく見ること、相手の立場に立って考えることは、福祉施設であれホテルであれ、対人サービスならば変わらない基本です。学生時代の学びにおいても、心配りの大切さを大事してほしいですね。福祉施設は人間関係がとても大事です。技術の習熟度だけが問題ではなく、温かい人間関係があつてはじめて、利用者さんの信頼を得られるのです。

私自身も、周囲の方々や恩師のおかげで老人福祉の道を歩んで来ることができました。先生や仲間との交流から学べることは多いものです。みんなで話し合つて、答えを考えていく練習をしっかりと続けていけば、そこで得たものは社会に出てからとても役に立ちます。

**藤本** 大学の皆さんには、うちの子どもたちに「当たり前」を提供するお手伝いをしてほしいと思います。児童養護施設は数も少なく、なかなか注目されないのが実情ですが、例えば人形劇、クリスマス会、誕生日会など、一般家庭、一般の保育の現場では当たり前と思われる経験がありますよね。その当たり前を経験していない人たちの、思い出の隙間を埋めていく仕事をするのが、社会福祉法人としての役割だと思っています。

**上田** 具体的な話になりますが、私たちにはぜひ兵庫大学さんと進めたいことがあります。それは今、うちの施設で取り組んでいる「職員の技術評価の可視化」です。今まで、職員の評価は上司の感覚だけで進められていましたが、今後は職員一人ひとりについて「ここまでできた」「次はここまでめざしてほしい」など、客観的にわかる能力評価の体系を構築したいと考えています。「自分に何がどれだけ足りないのか」「今、どれだけできているのか」など、個々人の長所や課題を明らかにしていきたいので、協力していただきたいのです。

**河野** 可視化については、本学では学生がどれだけ成長したかをきちんと評価し、その学生のさらなる向上につながるように、達成した成果を数値化、データ化する取り組みを進めています。この仕組みが社会福祉施設でも活用できるかなと思います。

## どんな時代でも、リアルな「経験知」を

**河野** 大学は人間性を磨く場です。コロナ禍にあつてもそのことに変わりはありません。人と触れ合い、多様な経験をする場としての大学の存在は大事です。今、本学ではさまざまな感染対策をとりながら、対面授業を進めています。やはり直接の交流があると、学生たちは生き生きしてきますね。どんな時も、人間的交流は大切にしたいです。ところが今は、そうしたことが大きく制約されている訳です。例えばボランティア活動のオファーが減っています。外からの刺激を与えると、学生たちは大きく変わるという面があるので、



●藤本 政則 ふじもとまさのり  
社会福祉法人 立正学園 包括施設長、兵庫大学・兵庫大学短期大学部非常勤講師。  
社会福祉法人 立正学園は、児童養護施設、児童家庭支援センター、地域小規模児童養護施設を加古川市、三木市、明石市にて運営。

これは気がかりなことですね。ボランティア活動の場で得た感動、達成感は次へ、その次へと活動を進めるモチベーションになるので、ウィズ・コロナの時代であっても何とか経験を増やしてあげたいですね。

**藤本** 学生さんのボランティアは本当にありがたいものです。以前、兵庫大学の吹奏楽部の皆さんに来てもらった時は、ただ演奏するだけでなく楽器の紹介もしてくださいました。初めて大きな楽器を見て、説明を聞いた子どもたちはとてもうれしそうでしたね。

**上田** これは大学生のお話ではありませんが、うちの施設に中学生がトライやるウィークということで体験に来ました。三世代同居が少なくなった昨今、初めて「おじいちゃん、おばあちゃん世代」と交流した子もいたのですよ。みんなカルチャーショックを受けたようでしたが、それが縁で年の離れた友情関係が生まれました。入居者さんと中学生たちが文通を始めた、たびたび遊びに来る生徒さんもいたり、よかったですよ。出会いのチャンスを増やしてあげることが大事なあとだと思います。

**藤本** 現場での実習は、若い人々にとって大事な出会いの場ですね。これからも、できるだけそういう場を提供していきます。

**河野** 学生にとって貴重な経験の場をご提供くださり、感謝します。

**上田** うちにもお声をかけてください。場の提供に協力しますよ。

**河野** 地域の施設には実習先として受け入れてもらい、専門力を向上させるよう頑張ってお話を聞いてもらいます。そして卒業後は専門家としてご恩返しができるようになる。そういう、いい関係を築いていきたいですね。

## 次世代の福祉を大学が牽引したい

**河野** 福祉の世界も、これからは経験と勤で仕事する時代ではありません。例えばケアマネジャーさんも、AIやデータベースを利用してケアプランを作るようになるかもしれません。コンピュータに任せられる部分は任せ、残りの「人でなければできない」部分をより充実させていきたいと考えます。

前に加古川市の福祉行政の方と話した時、市民の相談窓口のワンストップ化という話題になりました。今まで人海戦術でなんとかこなしていた部分をデータベース化することで省力化し、スピード

アップを図らねばと言っておられました。

「うちにはデータサイエンスを学ぶ学科がありますから、協力できますよ」とお答えしました。

また、2020年には看護学研究科が開設し、患者さんの最期や看取りに関するケアについて研究しています。人生の最期を穏やかに過ごすにはどうすべき

か。この課題は、福祉施設とともにしっかり考えていくべきだと思います。

児童福祉については、今後は個別指導計画に基づくきめ細かい指導が求められるようになるでしょう。才能、興味の方向などを、子ども本人に気づかせてあげる教育を進めることは重要です。こども福祉学科では、本学の附属教育機関を活用して、今までにない、一人ひとりを対象とした子どもの指導について研究を進めており、ゆくゆくは附属幼稚園などだけでなく、公立の教育機関にも研究知を提供していきたいと思っています。

**上田** 兵庫大学には福祉の専門家だけでなく、ビジネスの専門家を育ててくださることを期待しています。福祉施設は介護職だけでなく、営業職、事務職などいろいろな職員がいて成り立っています。スポーツやビジネスを学ぶ学生さんにも、就職の選択肢として福祉業界に興味を持ってほしいですね。

**藤本** 先ほど個別指導計画という話題が出ましたが、今や、児童養護施設も大部屋でみんなが集まって暮らすのではなく、個別対応になってきています。児童の独立を支援するには、個々人をよく観て、個別計画を立てていかねばなりません。そのことに関連して、大学といっしょに共同の課題の研究ができないかと思います。また、施設での仕事内容はPCの操作やスポーツの指導などもあり実に多様なので、職員には福祉以外の専門知識ももってほしいと感じています。

**河野** お話をうかがっていて、やはり本学の存在意義は専門知識と人間力を兼ね備えた人材育成にあると再認識しました。地域の皆さんからも、「困っている時に、兵庫大学の学生さんが親身になって対応してくれた」という話を聞くことがあります。また、学外の方は「兵庫大学に来ると、学生さんがしっかりあいさつしてくれる」としばしば仰られます。うちの大学には優しい子が多いです。その「やさしい人」「善き人」の部分をさらに磨いていき、専門職につく時にも、その善き面を専門家として生かせるようになってほしいと思っています。我々教育に携わる人間は、未来ある若者たちのために、地域の皆さんのご協力を得てこれからも取り組んでいきます。ここで学ぶ人たちは、資格や免許を取るだけでなく、大学での日々を人生の糧としながら「その人にしかない良さ」に磨きをかけていってほしいですね。

河野 博之



●上田 芳史 うえだ よしふみ  
社会福祉法人 正久福祉会 理事長、  
明願寺住職。  
社会福祉法人 正久福祉会は、特別  
養護老人ホーム、ショートステイ、  
グループホーム、ヘルパーステー  
ションなどを宍粟市、宝塚市、神戸  
市にて運営。





●株式会社加古川ヤマトヤシキ代表取締役  
伊藤 正人

●兵庫大学・兵庫大学短期大学部副学長(研究・社会連携担当)  
田端 和彦

## 企業 | 加古川ヤマトヤシキ × 兵庫大学



# 加古川駅前から まち、ひとが輝く未来を

活気に満ちた地域づくりを進めるために、本学はさまざまな組織と連携して多彩な取り組みを続けています。JR加古川駅南側に位置する百貨店・加古川ヤマトヤシキとのコラボレーションもその一つで、昨年(2020年)6月には兵庫大学の生涯学習機関エクステンション・カレッジ(EC)のサテライト教室を同店の3階に開設しました。地域に元気や楽しさを提供するために、本学と百貨店の連携でできることは、田端和彦副学長が加古川ヤマトヤシキ代表取締役の伊藤正人氏と話し合いました。

### ——連携協定から駅前エクステンション・カレッジ開設

**伊藤** 兵庫大学と2019年末に連携協定を結んだ折、「何か一緒にできないか」と声をかけていただきました。その中で浮上したのが、兵庫大学エクステンション・カレッジ(EC)のサテライト教室を加古川ヤマトヤシキのフロアに作る話だったのです。これは面白いと思いましたね。そこから話が進み、今年のオープン以来賑わいは上々

です。

**田端** 駅前のサテライト教室は、本学の学生も活用しています。例えば昨年の春には、こども福祉学科の学生が中心となって「こども大学」という地域の親子対象のイベントをサテライト教室などで実施し、リモートで発信しました。緊急事態宣言下で出歩けない中、多くの親子に楽しんでいただけました。この教室のおかげで、キャンパスで行うのとは一味違うイベントが実現できたと喜んでいます。

**伊藤** 弊社に限らず地方の百貨店は、昨今厳しい経営状況に立たされ、大量の店舗閉鎖が続いています。我々も生き残りを模索し、さまざまな工夫を続けていますが、地域の社会人のために知的な交流の場を形成することは、集客につながる新たな取り組みになるのではと期待しています。

百貨店内で企業が主催するカルチャースクールが開かれるケースは、前例もあるかと思いますが、大学主催の生涯学習講座を百貨店で開催するのは、なかなか珍しいことです。兵庫大学ECの当社取

益への波及について、まだ具体的な数字は確認していませんが、集客効果が出ているのではないかと感じています。

### ——行政も巻き込んで、文化・生活の発信拠点をつくる

**田端** 加古川ヤマトヤシキさんは、本学との連携のほか、加古川市とも連携を進めていますね。今秋には市立図書館も開館すると聞きました。

**伊藤** 各フロアを紹介しますと、まず上層階部分は、すでに開設している子育てプラザなど行政施設のほか、加古川市立図書館の移転が決まっています。さまざまな公共の施設が揃い、市民の皆さんが公共サービスを便利に利用できる場となる予定です。

**田端** 中層階は、本学の教室があるフロアを含みますね。

**伊藤** 地下から4階までは、百貨店である加古川ヤマトヤシキと専門店の売り場です。3階に兵庫大学ECが入ったことで、この駅前ビルに産官学が足並みをそろえて入居することとなりました。今後この場所は、加古川のまちをもっと元気にするための文化・生活拠点に育てていけると期待しています。

**田端** 図書館がオープンすれば、また駅前の人々の流れが変わるでしょう。本学の学生も図書館ボランティアとして参加できればいいですね。また、子育て支援の施設と協力して、学生が参加する読み聞かせイベントも開催できそうです。ヤマトヤシキのリニューアルと図書館開館が、駅前活性化のきっかけになることが望まれます。

**伊藤** 加古川駅前の活性化は、旧来の駅前商店街が低迷している中で、非常に重要な課題です。なんとか駅前が賑わっていかないと、東播磨地域の経済は落ち込んでいくばかりですから。

**田端** 駅前商店街も、モノを売るだけの場から、さまざまなサービスや憩いの時間を提供する場になっていくべきでしょう。百貨店と商店街がいっしょにできることもあるのではないかと思います。本学も一緒に取り組みたいですね。

### ——播磨発の「いいもの」を集めたショップがオープン

**伊藤** 地域産業との結びつきという点では、昨年、加古川ヤマトヤシキ1階に「播磨モノ語り」というショップを開設しました。ここは地域の名産品を集約して販売するスペースで、現在、食品や服飾雑貨など100近くのブランドを取り扱っています。企業の製品だけでなく、地元の高校の生徒さんが企画した手作りカレーなども展開しています。播磨のいいものが一堂に会しているということで、高く評価されています。

**田端** 本学が連携している企業や学校からも、出品したいという声が上がりがちです。

**伊藤** このコーナーはお客様の声のヒントになって生まれました。「駅前百貨店内にどんな場所があればいいと思いますか」とお客様に伺うと、「地元の名産を手軽に買えるお店」という声が返ってきました。「ならば、道の駅が百貨店にあつたらいいのでは」と話が進み、開店の運びとなりました。

**田端** 確かに「播磨モノ語り」というショップは魅力的ですね。

### ——地域の個性がにじみ出る魅力的なまちづくりを

**田端** 10数年前、ヤマトヤシキの顧客分析などをして、その時には「団塊とそのジュニアの皆さんにどうアピールするか」が重要課題でした。そのボリュームゾーンに続く核となる顧客層についての決め手がない。いまだに定まっていないのが実情です。とはいえ、まちづくりにせよ商業施設の顧客維持にせよ、大事なのは「魅力」「特色」を打ち出すこと。ヤマトヤシキさんは今後も加古川駅前の顔として、個性ある百貨店として頑張してほしいですね。

**伊藤** 加古川駅前の今後の人の流れをイメージしたとき、大人がゆっくり滞在できる場所がもっとなればいけないと感じます。加古川はコロナ禍以前から、若者や大人が夜あまり出歩かない。街に魅力がないからなのではないと思います。コロナ禍が収束した時、外国人観光客によるインバウンド消費が望めるかという点、このままでは難しいと感じます。

**田端** 加古川は交通という点では、なかなか利便性がよいのですが、長期滞在する機能が整っていないですね。もともと工業都市だからでしょうか。

**伊藤** やはり、今後はインバウンド消費も拡大してほしいですね。東播磨地域は、食、ショッピング、スポーツなど、いろいろな海外からの顧客誘致が期待できる潜在的な要素はあると思います。

**田端** 本学の課題の一つにも、海外からの留学生を増やすことがあります。地域との連携に根差しつつ、国際性のある学びを提供できるようになりたいですね。グルメに関しては、栄養マネジメント学科の学生たちが新しい「加古川の名物」となるメニュー開発に取り組んでいます。

**伊藤** 多くの地方百貨店が、著名な専門店をテナントとして誘致し、賑わいを作るというモデルを採用してきましたが、それはもう行き詰まっているように感じます。その次を考えないといけない。

これからの地方百貨店の生き残りに重要なのは、やはり地域との連携です。大学、行政も含めて、いっしょにまちの活性化を進めていきたい。そこに光明があると思います。

**田端** 兵庫大学は、全ての世代の人が生きがいをもって楽しく生きていくお手伝いをする場です。社会人のリカレント教育にも、今まで以上に注力したい。地域をもっと元気にするため、一緒に頑張っていきたいと思います！



# 東京サテライトオフィス、本格スタート 大学院の学びを充実させる リアルな拠点が東京に

2020年4月に開設した現代ビジネス研究科に、今春より東京サテライトオフィス(TSO、東京都中央区)が誕生しました。その特徴は、ふだんはリモートで学ぶ学生たちが一堂に集い、教員や仲間と熱い議論が実現できる場であることです。東京という立地を生かし、多様なネットワークを創出できるこのサテライトオフィスは、地域ビジネスの現場の活性化に取り組む学生たちの新たな研鑽の場として活用されています。詳しい話を現代ビジネス研究科・松本茂樹研究科長に聞きました。



## 「この時期だからこそできること」を徹底的に進めよう

「地方創生のリーダーを育成すること」をテーマとして、2020年4月に誕生した兵庫大学大学院現代ビジネス研究科。しかし折悪しく新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、その船出は順風満帆とは言えないものとなりました。ベトナム人の院生が来日できなくなり、最初から授業をリモートで進めざるを得なかったのです。しかし研究科ではそんな状況を「インターネットを利用すれば、大学院で学びたい人が場所の制約なしに学べる」とポジティブに捉え直し、「地方の活性化に取り組みたい」と願う志高い若者たちを対象に、Web会議システムを活用したバーチャルな学習環境を整えました。ネットにつながることができれば、どこにいても学ぶことができるようになりました。

## 学生と教授陣がリアルに語り合える拠点を

それでも、バーチャルな学びを補完する「みんなが一堂に会してリアルに語り合う場所」の必要性はなくなりません。院生たちは、出身地も居住地も各地に分散し、多数の院生がすでに社会の各分野で活躍しています。教授陣も地域創生のコーディネーター、IT分野の第一人者など多忙な人材揃い。そんな学生と教授陣が顔を合わせるには、交通の便利がよく集まりやすい場所が絶対に必要です。そこで昨年の9月、東京都内の利便性の高い場所にサテライトオフィスを設置。今年4月からは本格的に始動しました。大学院ではここを拠点として、東京という地の利を生かしたさまざまな試みを計画しています。他大学院との単位互換制度もその一つ。教授陣の人的ネットワークを活用し、東京大学大学院

などの単位互換を行う予定です。また、総務省やその外郭団体、地域活性化を担う諸団体との連携を深めていくことも考えています。

## バーチャルとリアル、双方のよさを提供したい

私たちは、サテライトは東京だけで十分だとは考えていません。多様な地域の現場を見て、考え、活動する学生をサポートするために、各地の自治体や大学、各種組織と連携し、もっと多くの拠点を作っていく予定です。本学は、世界中の学生がバーチャルとリアル、両方のキャンパスからメリットを得ながら大きく成長していけるような環境を提供していきます。このサテライトから日本、そして世界を動かす力が巣立っていくことを願っています。

## 東京サテライトによる「現代ビジネス研究科」の目指す姿

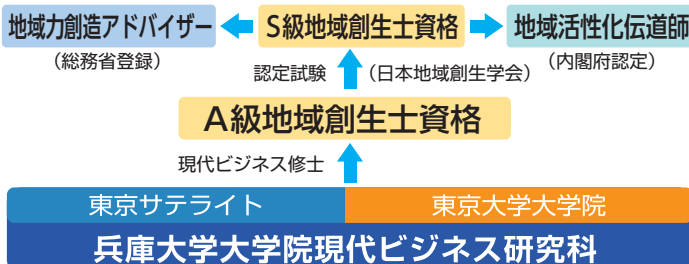
21世紀の未来のために地域創生で確実な成果の出せる人材を育成する

育成  
方策

- ▶ インターンシップ、シャドーイング等実践演習
- ▶ 東京大学大学院「地域創生講座」単位互換準備中
- ▶ 客員教授はじめ地方創生所管省庁の講師陣による講座開講
- ▶ 社会人院生を主体としたオンライン授業
- ▶ 地域創生実践プラン指導

メリ  
ット

- ▶ 現代ビジネス研究科の教育力向上(全国・世界に通用するレベル)
- ▶ 各省庁との関係強化(施策動向等情報収集力・講師人材確保)
- ▶ 東京大学大学院との協定(予定)によるブランド力向上
- ▶ 首都圏での院生募集力と院生の質向上



※構想中





●現代ビジネス学部現代ビジネス学科 教授  
元Yahoo!JAPANで「Mr.検索」と呼ばれた  
データ活用の第一人者。  
専門：ウェブサービス、サービスマネジ  
メント、地方情報化  
[研究テーマ]行政DXのマネジメント/観  
光DMOにおけるデータ活用など  
宮崎 光世

今の時代、データ活用は組織の生き残りに必須であり、その知識と運用力はすべての分野で求められています。現代ビジネス学科では、検索エンジン開発の第一人者である宮崎光世氏を教授に迎え、AI・データサイエンス活用副専攻を設置。企業や自治体におけるデータ活用の実際を、実践例を交えながら学生に教えていきたいという宮崎教授と、松本茂樹学部長が語り合います。

# デジタルデータを使いこなし これからのビジネスを担う人材を育成

現代ビジネス学部



●現代ビジネス研究科長  
現代ビジネス学部 学部長 教授  
専門：地域創生、起業創業  
[研究テーマ]スタートアップ・エコシ  
テム構築の条件 / インターンシップの  
教育効果 / 環境NPOの政策アドボカシー  
など  
松本 茂樹

## データ活用は分野を超えて重要

**松本** 現代ビジネス学科は地域創生が主要なテーマですから、データ活用能力をもって地域創生をさらに進めていける人材を育成したい。どの専攻の学生も、それぞれの内容に合わせてデータ活用を学んでほしいと思っています。

**宮崎** この副専攻は「文系」というスタンスで、計算機科学ではなく、データ活用による課題解決を学びます。「自分にサイエンスが学べるか、心配だ」と言う学生もいますが、実社会では文系、理系問わずさまざまな分野で活躍する人がいます。これからは一部の専門家ではなく、普通の人々がデータ活用のリテラシーを上げることが大切な時代。初心者であることを恐れず、新しいツールを使って新しいことをやっていきましょう。多くの学生が「今まで学んできていない内容。難しそうだが、すごく面白そう」と目を輝かせてくれます。彼らのそんな好奇心を絶やさないう頑張りたいですね。

## 多くの企業がAIを活用する時代の担い手に

**宮崎** 私は、AI研究開発を担う人材が活躍す

## AI・データサイエンス 活用副専攻を設置

る時代から、AI環境に適応し、活用していく人材が中心に活躍する時代に徐々にシフトすると考えています。今も、AIの世界で最先端の研究開発をする企業は世界でもごく少数。実際にはその次の、大規模な開発でデジタルプラットフォームを構築する「GAF A」などの企業が、ビジネスを動かしています。そして、最近非常に増えてきたのが、既存のプラットフォームを導入してビジネスに活用する企業。しかし世界には「AIをまだ導入していない。今後は是非やりたい」と思っている企業の方が、まだはるかに多い。兵庫大学の学生には、こういう大多数の企業が「AIの力でビジネスを進める」層へと

シフトするのを担う人材になってほしいのです。

## AI時代の感覚を身につけ、社会になく力を

**松本** AIやデジタルと普通の生活をつなぐ人材が重要ですね。兵庫大には情報学系の専門家はたくさんいます。そこで、その先生方の専門分野と、社会で求められる、人の暮らしと関わる仕事をつなぐ学びを副専攻で実現できたらと思っています。

**宮崎** 両者をつなげば、ビジネスの世界にも大きなチャンスが生まれます。この副専攻で学ぶことで、学生にはチャンスを手にももらいたいですね。今のデジタル系の仕事は、進め方が昔と違います。以前は、きちんと計画を立て、一つの段階をクリアしてから前へ進んだ。今は、不完全な状態でいいからどんどん先へ進めて、何度でもやり直し、フィードバックして完全なものへと仕上げていきます。副専攻では、AI時代に特有のそんなプロジェクトの進め方も学んでもらうつもりです。

**松本** 宮崎先生は、Yahoo!JAPANでデータ活用を推進されたパイオニアであり、現場での活動も続けながら本学で教鞭をとってくださるので、リアルな仕事場の感覚を学生に伝えてくれると期待しています。



本学附属幼稚園も米野講師の研究の場

# 子どもの身体活動を計測し、 体を動かすことの意義を 客観的に証明する

次の時代の健康を育むために

●健康科学部健康システム学科 講師 専門：発育発達学、身体教育学、子ども学  
米野 吉則

【研究テーマ】幼児から学童期における身体活動量の向上を目指した介入研究/  
学校教育における援助希求の支援に関する研究など

があるのではと思うからです。この仕事は、園長をはじめ先生方のご理解とご協力がなければ成立しません。そういう研究に取り組めていることに感謝しています。

——研究に取り組もうと思いついたきっかけを教えてください。

幼稚園で養護教諭として勤務していた頃、健康指導や運動指導をしながら、子どもたちの身体活動量と睡眠時間の少なさを痛切に感じていました。やがて「この問題は、一人ひとりの先生が現場で頑張るだけでは、なかなか改善されないのではないか」と考えるようになり、子どもの健康の専門家として研究を始めようと決心しました。

——地域の人々の健康増進に向けた社会活動について聞かせてください。

学生たちと一緒に、2018年から加古川市、播磨町、稲美町、高砂市の2市2町において高齢者の「ロコモティブシンドローム予防講座」を行うほか、各地で子どもと高齢者のための運動と健康をテーマに、講演、教室、ワークショップを実施しています。学問的知見は現場に還元することが大事ですから、今後も研究と実践活動のバランスをとりながら進んでいきたいと考えています。

——学生の指導で意識していることは。

学生には、教えすぎないように努力しています。彼ら自身が学ぼうという意欲をもつことが、最も大切だからです。課題に取り組む時には、これまで生きてきた力をフルに生かして考え、自分なりの答えを生み出してほしいですね。現場に行けば、解決できないことや分からないことがたくさん出てくるでしょうが、つねに問題意識をもって歩み続けてほしいと思います。

幼稚園で「保健室の先生」として子どもたちを見つめ続けてきた経験を生かし、幼児期の心と体の健康を研究する米野吉則講師（健康システム学科）。「幼い子どもにとって、遊びは生きていくのに必要なことの多くを学ぶ場である」という立場から、子どもが「体を動かすと気持ちがいい」という感覚をしっかりと持てるようにすることが大事だと語ります。

——保育園や幼稚園で子どもの身体活動を計測していると聞きました。

私は、子どもの頃の身体活動が成人期の心と体の健康にどう影響するか、また保育者や家族が子どもの幼児期の身体活動をどう支えていくべきかをテーマに、行政に対する政策提言まで視野に入れて研究を進めています。

4～6歳の子どもたちを対象に、本学の附属幼稚園をはじめ、熊本、福岡、埼玉県の保育園や幼稚園で、運動やダンスなど体を使った活動を計測し、行動の効果を評価しています。子どもたちを社会的に支えるためには、行政とともに幅広い活動を進めなくてはならず、そのためには確固としたエビデンスが必要ですので、各園の先生方と連携して、データの蓄積を進めています。

幼児を対象にした研究は数値化しにくく、研究方法を模索していた時期もあります。そんな中で、身体活動の強度や時間を簡単に計測できる活動量計という計測機器に着目しました。これはとても小型で、現場の先生のご苦勞も少なく、機器を装着する子どもたちもあまり負担を感じずにすむものです。

共同研究を続けている幼稚園の先生からは、積極的に感想をいただきます。現場の専門家の実感から出たアイデアに、研究のヒント



# 理論と臨床の両面から 依存症者と支援者の 支援に取り組む

支援をする人と受ける人、  
両者の充実した生活をめざして

●生涯福祉学部社会福祉学科講師 専門：メンタルヘルス、アディクション  
朝比奈 寛正

「研究テーマアルコール関連問題に対するソーシャルワーク精  
神障害者の地域移行支援、救急病院と精神科病院の連携など」



KJ法との出会いは研究に大きな影響を与えた



朝比奈寛正講師(社会福祉学科)は、大学時代の実習で薬物依存症の人々と出会い、卒業後は精神科病院の精神保健福祉士として、さまざまな依存症者の支援に関わってきました。その経験から、もっと効果的な支援を追究したいという思いが膨らみ、臨床の仕事を続けながら大学院に進学。現在は現場が分かる研究者として、ソーシャルワーカーをはじめとする支援の専門家から厚い信頼を得ています。

## ——大学院での研究で、何を得たと思いますか。

当時の私は「ワーカーは依存症の人に対してどう支援するか」という課題をめぐって、既存の概念を超える方法論がないかと模索していました。修士時代にはワーカーへのインタビューを数多く行ない、質的な側面から研究を進めていましたが、なかなか納得がいく解決法が出せませんでした。そもそも病院での仕事を抱えながらの研究活動だったので、正直に言うと本当に大変でした。

そんな中、博士課程に進んだころに出会ったのが、研究者の主観を活用して情報をまとめ図解化、叙述化する「KJ法」という分析方法です。この出会いによって自分の感覚を言葉にして、人に伝えることができるようになり、質的研究を深めることができました。

## ——研究活動とともに、専門職の養成にも力を注いでいますね。

対人援助の専門職であるソーシャルワーカーの養成は重要な使命です。現場を知る者でなければ、専門職を育てるのは難しいと思います。

学生にはつねに、「自分はどう考えるか」を繰り返し言語化するよう働きかけています。それが現場での対応力、コミュニケーション力を伸ばすのです。時折「朝比奈先生は正解・不正解を教えてください」と言われますが、精神科の領域にはやってはいけない対応、考え方はあっても、こうすれば間違いなく正解というものはありません。そのことを理解してほしいと思います。

学生がよく戸惑いを感じるの、精神科病院における実習です。彼らが今まで見聞してきた世界と違っているからです。例えば福祉系の高校で高齢者ケアを学んできた学生は、メンタルヘルスの場では高校時代に学んだ知識や経験が通用しない場合があることに気づき、悩みます。彼らは本当に苦しむのですが、実はとてもいい経験をしています。そんな学生には「君は今、真に成長しているんだよ」と言っています。

## ——今後の取り組みについて聴かせてください。

研究については、これまでアルコール依存者に対する支援を主テーマとして進めてきましたが、今後は、アルコールに加え、薬物やインターネット依存症者への支援にも領域を広げていきたいですね。

実践活動では、以前から福祉の職能団体に関わり、専門職の研修会、講習会などの講師を務めるほか、会員すなわち専門職に対するサポートなどを行なっています。対人支援の質の向上のため、これらの活動には引き続き注力していきます。

## ——最後に、現場で奮闘する支援者と、これから社会に出る学生に一言。

24時間365日、支援者であり続けなくてもいい。勤務時間外には一般住民としての楽しみを味わって過ごしてください。長く福祉の世界で活躍し続けることを願っています。

# 子どもたちが音楽で 外界とつながる瞬間を 大切にしたい

リズムや音が、心と体に与えるものは

●生涯福祉学部子ども福祉学科准教授 専門・音楽学、臨床心理学  
立本 千寿子

「研究テーマは乳幼児の心身と音・リズムに関する心理学的研究／療育と子育て支援」



ゼミ生による手作りの楽器を持って

乳幼児の心身の発達や子育て支援に関する研究を進めている立本千寿子(こども福祉学科)准教授は、臨床心理学と音楽学の専門家です。音楽を通じて子どもと養育者のサポートをしたいという立本准教授に、幼保・こども園や子育て支援などでの豊富な臨床経験に基づいた研究の魅力を聞きました。

## —「母体心拍音」についての研究に力を入れていると聞きましたが、どんな研究ですか？

世界中どこでも、心を落ち着かせる童謡やわらべうたなどは1分間に70から90拍の穏やかなテンポの曲が多いです。一方、女性の拍動も平均70から90拍で、国籍や人種による差はさほどありません。胎児にとって、母体の大動脈から聞こえる拍動音とリズムは初めての音体験なので、心拍が刻むリズムは安心や癒しを乳幼児に与えるのではと仮説を持ちました。

調査では、幼児に無音、母体心拍音、オルゴール音を聴いてもらい心拍数を測定しました。その結果、母体心拍音を聴かせると、幼児の心拍数が減少することが示唆されました。このことから、母体心拍音の音・リズムは、幼児にとって肯定的な影響がある音源であると考えています。



ゼミ生による手作りおもちゃ(写真上)母体心拍音を収録した、音の出るぬいぐるみは大切な研究ツール(写真左)

## —海外との共同研究を進めているそうですね。

フィンランドは特別支援教育に力を入れている国で、発達に障害のある子どもへのサポートに関しても先進的です。今後、フィンランドの特別支援教育のスタッフと共同で、母体心拍音の発達に課題を持つ子どもへの有効性について研究を進めていく予定です。

## —音と心にかかわる研究を始めたきっかけは？

教育系の大学でピアノを専攻していた時期は、ピアノは、よい音色で正確に表現豊かに弾くことに注力していました。しかしある日、特別支援学校での実習でひとりの自閉スペクトラム症の子どもと会いました。授業を行った後、休み時間にその子が無表情で私の手を引っ張って、グランドピアノの前に座らせたので、私は「弾いてほしいのかな」と思い、弾き始めました。するとその子はピアノの下に潜り込み、実にうれしそうに音に聴き入ったのです。音楽の力を感じて純粋に感動しました。それから、音楽を使って子どもたちが安全に過ごせる基地が作れないか、と考えるようになり、大学院に進学して臨床心理学、音楽療法を学びました。そのころから大学の附属相談室でプレイセラピーを行ったり、分離不安をもつ保育園児に音楽療法を実施したりするなど、臨床活動も始めました。

臨床の場で気をつけていることは、ひとまず対象者の全てを受け入れること。自分の物差しは一度捨てて、相手の話を聞く。その後で、必要ならば専門家としての物差しを活用し、コミュニケーションを進めます。

## —兵庫大では音楽療育などの科目を担当されていますね。

演習では、実際の現場で音楽を使った子どもの支援ができるように、楽器づくりや、フラフープを使った体の動かし方なども学んでもらいます。学生からは「先生、いつも楽しそう」「先生から元気をもらった」などと言われますが、私の方こそ学生と接することでパワーがもらえると思っています。人生の大切な時期を生きている学生たちの、未来を描き実現させていく過程を見守れることは幸せなことだと思っています。

科学研究費 採択研究テーマ

独居高齢者の在宅生活継続における  
意思決定支援についての基礎的研究

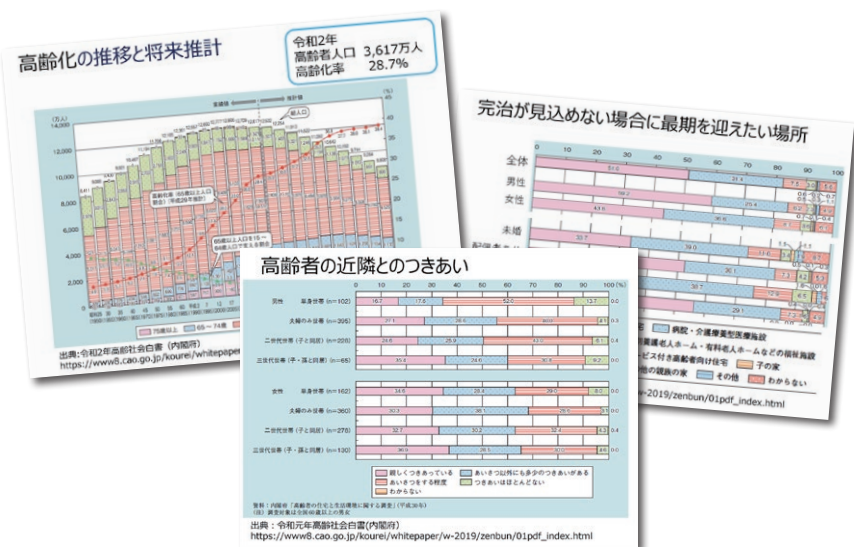
# 高齢者のよりよい暮らしの実現へ向けた基礎研究

科研費(科学研究費助成事業)とは、文科省および独立行政法人日本学術振興会が、学術研究の発展を目的に創制的・先駆的な国内の研究者・研究グループへ、審査を経て交付される助成金です。本学の石井久仁子講師(看護学部看護学科)は、高齢者看護学および地域看護学関連の基礎研究において、2019年度から3か年にわたり助成金が交付されました。



●看護学部看護学科 講師 専門：公衆衛生看護学  
石井久仁子

【研究テーマ】地域包括ケアシステム/他職種連携におけるケアマネジャーの役割/独居高齢者の在宅生活支援の継続支援/認知高齢者のケアマネジメント/遠隔看護の活用など



石井講師の研究の根拠となるデータ  
「令和元年、2年度高齢者白書(内閣府)より」

## 1. 研究の背景について

～独居高齢者が在宅生活を継続するうえでの課題

高齢化が進む中、高齢者の単身世帯も増加しています。家族と同居、または、家族が身近にいる人と比べ、独居や身寄りのない高齢者は日常の細やかな見守りやケアが得られにくく、要介護状態になると在宅生活を続けることが難しくなったり、急病時の搬送や死亡後の発見の遅れなどの問題が生じることがあります。また、認知症の発見の遅れなどによって、相談支援機関に繋がったときにはすでに本人の意思確認ができない場合もあります。高齢者ご自身が「自分の暮らしは今後どうなるのか」という不安を抱える一方で、地域包括支援センターのスタッフやケアマネジャーなどの援助者(以下、援助者と表記します)も課題を抱えています。現在、国は、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期ま

で続けることができることを目指し、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築を推進しています。住み慣れた自宅で生活を続けたいというのが多くの人の願いですが、そのためには高齢者自身の意思決定と自助、互助機能が重要になります。

## 2. 研究をどう進めるか

～高齢者本人の意見と専門職の支援経験を  
集め、課題抽出

今回の研究は、独居高齢者の在宅生活における意思決定支援の実態と課題を明らかにして、今後の備えのための支援を検討することを目指しています。高齢者自身がどのように在宅生活を継続し、最期をどこで迎えたいか意思決定ができるように、援助者と話し合いながら備えを進められる具体的で使いやすい指標を作りたいと考えています。そのために、まず高齢者が在宅生活を中断するにいたった状況、高齢者自身の備え、援助者の支援内容などに

ついて援助者から意見を集約します。さらに独居高齢者に現在の生活状況と今後の意向、そのための備えの有無について聞き取りをします。これらのデータを元に分析を進め、在宅生活を継続の意思決定を支援するために必要な項目をリスト化します。結果については学会などを通じて情報を提供し、現場で働く多くの専門家のみなさんにリストを活用していただきたいと考えています。研究活動を通じ、一人ひとりが希望に沿った生き方を実現し、「万が一」にも備えることができるような環境づくりをしていきたいと思っています。

## 3. 研究と教育

～研究を学生へフィードバック

この研究はまだスタートしたばかりです。コロナ禍の影響でなかなか作業が進まないのも実情ですが、将来的には学生にも研究の内容を紹介していきたいと思っています。看護や福祉をはじめ、対人援助職の道を目指す学生たちにとって、現場で起きている課題について探求し、自分にできることを考えていくきっかけに繋がればと考えています。また、本学は栄養・運動・保育に関する学科もありますので、学科間の連携協働を進めることで、独居高齢者の支援や介護予防、世代間交流などの地域貢献ができるのではないかと考えています。

加古川市の  
「協働のまちづくり推進事業」  
スタート応援型(学生枠)

「健康経営」とは、健康問題を個人でなく企業や自治体などの組織の経営的な課題と捉え、健康づくりをみんなで行うことが組織の利益につながるという考えです。健康経営の実践として、健康スポーツ指導者をめざす学生たちが、加古川市の「協働のまちづくり推進事業」で市民の健康づくりに取り組んでいます。

# 駅舎でのポスター掲示で 地域の健康づくりを応援!



●健康科学部 学部長 健康システム学科  
専門：健康科学、運動処方 朽木 勤教授

●健康科学部 健康システム学科 4年生  
上条 亮明(兵庫県立淡路高等学校出身)

●健康科学部 健康システム学科 4年生  
前田 久瑠実(県立姫路商業高等学校出身)

## 楽しさがあって、話題になるポスターを

2020年度Ⅱ期(後期)、朽木教授と学生たちは、「健康づくりナッジ」の理論を用いて行動変容をそっと後押しするような健康啓発ポスターを制作しました。伝えたいメッセージは「エレベーター、エスカレーターがあっても階段を使うことが、健康の意識向上になる」。10名の学生たちはアイデアを出し合い、2班で2枚ずつの計4作品のポスターを完成させました。

上条さんの属する「健康意識向上チーム」は、階段上りのタイムを測る『16段チャレンジ』をテーマにポスターを制作。「これは、ゲーム感覚で階段を上ってほしいという思いから作りました。体力チェックの結果がすぐにわかるようにして、『やってみようかな』という気持ちになることがねらいです」(上条さん)。もう1枚は、月曜は呼吸、火曜は背すじなど、曜日ごとに体の一箇所に意識を向けながら階段を上ると「1日1意識!」ポスターでした。

一方、前田さんたち「自己管理能力向上チーム」は「新しい日常」をキーワードにしたポスターを作りました。「新型コロナウイルス感染拡大によって生活が大きく変化しています。身体活動不足が指摘されるなかで少しでも健康につながる新しい生活習慣として、階段上りが定着できるように工夫しました」(前田さん)。ポスターは、1日100段分の階段上りを約3カ月続けようという「100段100日」編と、コロナ禍だからこそ階段を使おうと呼びかける「Go to 階段」編。こちらは、Go toキャンペーンの話題に掛けて人々の印象に残ることをねらいました。

## ポスターの効果を検証

でき上がったポスターは学内およびJR東加古川駅の階段に掲示し、「学内では、他学科の先生か

らこれを見たら階段を使わなきゃね、と声をかけていただきました」(上条さん)。「駅では、私たちが貼る作業をしているときにも『いい試みですね』と評価してくださる人がいました」(前田さん)。

さらにポスターを貼ったことで、階段を上る人は増えたかを検証。調査の結果、前田さんの班で



は「明らかに増えた」、上条さんの班では「さほど変化がなかったけれど、多くの人が目を向けてくれていました」という結果でした。調査期間があまり取れなかったことが課題として残りました。

学内のポスター掲示は、今回で3年目。駅での掲示は、上条さんが加古川市にプレゼンテーションを行ない、2021年度も事業が継続できることが決まりました。「私たちは先輩のプレゼンでこの事業ができるようになりました。そして次の学年に引き継がれます。ますますパワーアップした取り組みを期待します」(上条さん)。

## 実社会に大学での学びをアウトプット

朽木教授は、より多くの人が健康づくりを実践できるようなアイデアを、学生にはチームで企画・提案させ、議論してまとめることを求めています。「実社会ではチームで仕事をすることが多いので、ここで経験したことを活かせる場面が、これからたくさんあると思います」と朽木教授。学生たちも、自分たちの考えを地域社会にアウトプットできる素晴らしい体験だったと満足そうでした。



JR東加古川駅に掲出したポスター。それぞれに工夫が凝らされている。

人形劇団  
わくわくさんのポケット

地域、子どもたちとのふれあいが  
人形劇から広がった！

「わくわくさんのポケット」は、地域の子もたちを対象に公演を重ねてきた、学生による人形劇団。以前は、多ければ年間50件もの出演依頼を受けたという人気団体です。現在は新型コロナウイルスの影響で思うような活動ができなくなっていますが、子どもたちとの新しい出会いに備えて、熱心に練習を続けています。

高倉さんとリモート取材の坂根さん、  
どんなときもスマイル！



●生涯福祉学部 子ども福祉学科3年生  
「わくわくさんのポケット」部長  
高倉 彩穂(兵庫大学附属須磨ノ浦高等学校出身)

●生涯福祉学部 子ども福祉学科3年生  
坂根 ここの(京都府立福知山高等学校出身)

リモートでも練習を継続

2020年の2月まで、地域の保育園などで公演を行っていた「わくわくさんのポケット」(通称「わくポケ」)。多い時であれば、年50回ほどの公演をこなしていました。しかし、新型コロナウイルス感染対策から、2020年度に入ると公演はすべて中止。8人の部員全員が集まることもむずかしくなりました。半年の活動中止の後、オンライン部活が始動したのが、2020年8月。10月には8カ月ぶりに仲間との対面が実現し、以後は月に2回のペースで活動を続けています。

久しぶりのミーティングを経て、改めて感じるのはコミュニケーションの重要性。部長の高倉さんは「今年は人形の制作にも力を入れています。話し合っ工夫しながら劇を作っていきたいと思います」。ピアノ伴奏を担当する坂根さんは「ふだんはチームメートのことをイメージしながら



家で練習していますが、BGMをどのようにするか、どのタイミングで入れるかなど、重要なことは率直に意見を出し合っ決めていきます」。

子どもたちの反応から得られる喜び

人形劇を演じる魅力は、どんなところにあるのかを聞きました。「見ている子どもたちが、音に合わせて体を揺らしたり、人形を指差したりしているのを見ると、ああ、反応してくれていると思い、うれしくなります」(高倉さん)。子どもは一人ずつ感じ方が違い、同じシーンにウキウキする子もいれば、怖がって泣く子もいます。どんな反応が返ってくるのかと考えると2人は楽しくなるそうです。「舞台では一瞬一瞬の状況を見ながら、場面

の雰囲気ピアノの音で表現しなければいけない」と坂根さんは、劇と音楽の関係について語り、「むずかしいですが、続けているうちに瞬間的に現場対応する力がついてきたように思います」。

実社会に活かせる体験

人形劇の活動は、子ども福祉学科での学びにどのように役立っていると感じるかを聞きました。「子どもの気持ちや発達について、日頃の大学での講義や演習とは一味違う形で理解できるようになったと思います」(高倉さん)。さらに「以前は人前で話すのが恥ずかしかったのに、堂々と大きな声で演じることができるようになりました」と、自身の変化も実感しています。

坂根さんは、「上演しながら、見てくれる子どもたちの成長を観察できるので、勉強になります」。さらに、「一つの目標に向かってともに頑張る仲間ができた」喜びも味わっています。

保育園、幼稚園など、具体的に将来の進路をまだ絞っていない2人ですが、「わくポケ」での経験を生かし、子どもたちの心の動きを見逃さず、気持ちに寄り添える専門家になりたいと夢を語ってくれました。

再び公演ができる日のために準備を進めているのが「どうぞのいす」という新しい演目。今までとは違い、歌が入っているので、歌う人とピアノを弾く人、両方にとってどう表現するのが工夫のしどころです。



坂根さんはリモート取材です





- 現代ビジネス学部 現代ビジネス学科2年生  
王 梓(オウ シ)(中国・遼寧省出身)
- 現代ビジネス学部 現代ビジネス学科2年生  
デシ クリスティナ(インドネシア・バリ島出身)
- 現代ビジネス学部現代ビジネス学科 学科長 教授  
専門：情報工学(情報システム、ソフトウェア工学)  
榎木 浩

## 留学1期生の 挑戦

グローバル 現代ビジネス学科 留学生

# 将来の自分を見つめ、 可能性を伸ばす アジアからの学生たち

2020年春、現代ビジネス学部では本格的な長期留学生の受け入れをスタートし、海外からの留学生が入学しました。日本での学びのスタートを切った学生たちは、新型コロナウイルスの影響が大きかったこの1年で、どんなことを経験したのでしょうか。入学のきっかけ、本学での学びの魅力、将来の夢など、学生生活について聞きました。

●日本への留学のきっかけを教えてください。

**王 梓(以下、王)** 以前から日本文化に興味があり、日本で日本語を学んできましたが、ぜひ大学で勉強したいと思いました。兵庫大学を選んだのは、私の日本語の先生が、本格的に学ぶならば兵庫大学がいいと推薦してくれたからです。

**デシクリスティナ(以下、デシ)** 私のももとの興味はビジネスです。グローバルに活躍する日本企業に興味をもったことが、日本でビジネスを学ぼうと思ったきっかけです。ビジネスについて学ぼううちに、日本の文化にも関心をもつようになりました。

**榎木 浩学科長(以下、榎木)** 現在、現代ビジネス学科では、中国、インドネシア以外にベトナムやネパールからの留学生合計19名が、日本人学生と肩を並べて学んでいます。アジアの

国際交流が自然に行われ、活気あふれる学習の場になっています。

●現代ビジネス学科の学びの魅力は？

**王** 学習する内容が、とても実践的だということです。例えば、イベント企画の勉強をする際には、「現代ビジネス学科の学びをPRする」というとても身近な課題が与えられました。

**デシ** ビジネスコンペに積極的に参加できるので、実力を磨くチャンスが多いですね。チームでのコンペ出場を通じて、仲間とのコミュニケーション力も伸びているように思います。



**榎木** 実践的なチームプロジェクトに1年目から関わっていくことで、学生たちの実力を高めようと考えています。留学生にとっては、日本人の学生と一緒にチャレンジすることになるので、学生たちは協働でプロジェクトを進める力がぐっと向上しましたね。

●日本人学生との交流について。

**王** 友人とは授業や日常生活について、日本語で話します。互いの国の文化の違いがわかるので楽しいですね。

**デシ** 日本語で同級生と話すのは難しいですが、とても楽しい経験です。私は一緒に学ぶ仲間との交流を深めたかったので、兵庫大学の留学生交流会を立ち上げました。これからは、留学生と日本人学生が仲良くなるチャンスをもっと作りたいです。

**榎木** コロナ禍という大変な状況ですが、留学生、日本人学生間の交流機会をできるだけ設定し、どんな時にも学生たちが孤立しないよう、仕掛けづくりを続けていくつもりです。

●将来の夢を聞かせてください。

**デシ** 卒業後は日本で就職をして、ビジネスの経験を積むとともに、日本との関係を深めていきたいですね。その後、故郷のバリ島で起業するのが夢です。バリ島の自然や文化を生かした観光関連のビジネスを始めたいと考えています。

**王** 貿易関係の仕事に就きたいと思っています。日中間で需要の高い生活用品や化粧品、土産物などの輸出入に関わりたいですね。

**榎木** 留学生はいつも本当に頑張っています。この努力は、日本人学生にも大きな刺激になり、キャンパス全体が活気づいていくように感じます。留学生たちの今の努力は、将来大きく実を結ぶものと期待しています。



管理栄養士の資格を持つ吉田麻紀さん。本学を卒業した後、福祉施設で知的障害者や自閉スペクトラム症者とともに働く道を選びました。就職先は、国産大豆を使った手作り納豆の製造、販売に取り組む高砂市内の多機能型事業所。一般的な就労が難しいホーム利用者さんたちとともに、栄養学の知識を生かして活動を続けています。

### 栄養士×福祉に、新しい可能性を感じた

吉田さんは在学中、将来の進路として小学校の栄養教諭や保育園での食育指導などを考えていました。しかし、学科の先生からの紹介を受け、福祉施設への就職を決断。「利用者さんと一緒に納豆の製造、販売を行っている事業所で、さらに本格的な工房を設置して販路拡大や商品開発をめざしており、そのために栄養学の専門家を求めていると聞いたからです」。新しい可能性のある仕事だと直感し、実際に施設も見学したうえで、「ここで頑張ってみよう」と気持ちを固めました。

### 障害がある人と、心の距離を近づける

就職した当初は、職場にはすぐ馴染めるだろうと考えていました。「福祉系の学科の出身ではないけれど、大学ではボランティアサークルで障害のある人と一緒に活動する経験もしてきました。だから問題はないだろうと思ったのです」。しかし、1年目はやはり大変でした。「施設利用者さんからなかなか信頼してもらえず、やっていけるかなと難しさを感じました」。職場の先輩のように上手にコミュニケーションできないという悩みを抱えました。

## 心に障害をもつ人々とともに納豆の製造、販売に挑む

そんな中でも焦らず、利用者のことを理解しようと努めた吉田さん。先輩からのサポートも受けながら働くうちに、互いの心理的距離が近づいていきました。「作業終了時の報告などを、先輩職員さんでなく、直接私のところまで言いに来てくれるなど、少しずつ打ち解けてくれるようになった。うれしかったですね」。

### 納豆の販売を増やし、みんなを笑顔にしたい

昨年は納豆製造専用の施設「納豆工房なっこちゃん」がオープン。地元スーパーマーケットのほか、給食会社、他の障害者施設などに販売しています。「以前の3倍、1日に1000カップの納豆が出荷できるようになって、とても多忙な毎日です」。

将来の夢は、「新商品の開発をもっと進め、販路を拡大すること。もっとうちの納豆を食べてもらおうこと」。納豆の販売量が増えれば、施設利用者さんへの経済的還元が増えるとあって、力が入ります。納豆づくりの仕事自体も楽しいけれど、利用者さんの表情がいきいきと輝く様子を見るのが何よりうれしいそ



### 吉田 麻紀さん

兵庫大学健康科学部栄養マネジメント学科を2019年3月に卒業後、同年4月より社会福祉法人あかりの家ワークホーム高砂に勤務。納豆工房「なっこちゃん」所属

うです。

### 振り返って感じる大学時代の大切さ

吉田さんは、働き始めてから大学での学びの大切さがわかるようになったと語ります。「学生時代を振り返ると、食や栄養に関することをしっかり勉強させてもらったのだと感じます。当時の教科書や、先生から推薦された専門書は今でも使っていますが、『この本があってよかった!』と思うことは多いです」。

後輩へのメッセージを聞くと、「学生時代は思い切り楽しんで、自分にプラスになることをどんどんやってください。社会人になると忙しいですよ」。時間がある学生時代には、どんなことにもチャレンジしてほしいと締めくくりました。



●兵庫大学 兵庫大学短期大学部

設置者	学校法人 睦学園
設置年	兵庫大学 1995(平成7)年
	兵庫大学短期大学部 1955(昭和30)年
理事長	渡邊 東
学長	河野 真
校地・校舎面積	(校地面積)93,279㎡ (校舎面積) 31,059㎡
蔵書数	133,061冊

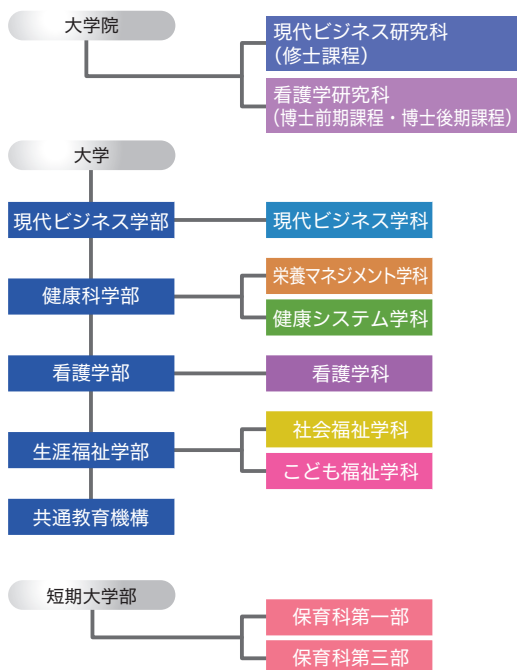
## 建学の精神

和

聖徳太子の御徳を慕い、その十七条憲法に示された「和」を根本の精神として仰ぎ、仏教主義に基づく情操教育を行い、有為の人材を養成します。

※本学は浄土真宗本願寺派(西本願寺)の宗門関係学校です。

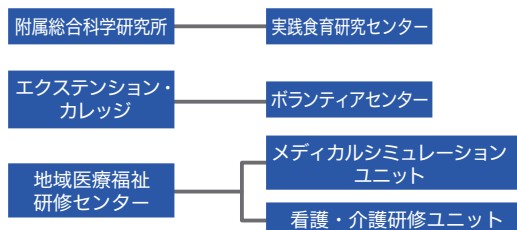
●兵庫大学・兵庫大学短期大学部教育研究組織



※経済情報学部経済情報学科及び健康科学部看護学科、経済情報研究科を除く。

附属施設・附置機関等

- 高等教育研究センター
- IR推進室
- FD・SDオフィス
- 障がい学生支援オフィス
- 社会連携オフィス
- 健康管理センター
- 教職・学習支援センター
- 学修基盤センター



●取得可能な資格 ★は国家試験受験資格 ☆は受験資格

大学	現代ビジネス学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●高等学校教諭一種免許状「公民」・「商業」</li> <li>●上級秘書士・上級秘書士「国際秘書」</li> <li>●上級ビジネス実務士・上級ビジネス実務士「国際ビジネス」</li> <li>●上級情報処理士</li> </ul>
	栄養マネジメント学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●管理栄養士★</li> <li>●栄養士免許</li> <li>●栄養教諭一種免許状</li> <li>●食品衛生管理者</li> <li>●食品衛生監視員</li> <li>●フードスペシャリスト☆</li> </ul>
	健康システム学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●養護教諭一種免許状</li> <li>●中学校・高等学校教諭一種免許状「保健体育」・「保健」</li> <li>●健康運動指導士☆</li> <li>●健康運動実践指導者☆</li> <li>●初級障がい者スポーツ指導員</li> <li>●ジュニアスポーツ指導員☆</li> <li>●社会福祉主事任用資格</li> <li>●第一種衛生管理者</li> </ul>
	看護学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●看護師★</li> <li>●保健師★</li> <li>●養護教諭一種免許状</li> <li>※保健師課程は選択制です。</li> </ul>
	社会福祉学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●社会福祉士★</li> <li>●精神保健福祉士★</li> <li>●高等学校教諭一種免許状「福祉」</li> <li>●社会福祉主事任用資格</li> <li>●児童指導員任用資格</li> <li>●福祉レクリエーション・ワーカー</li> </ul>
短期大学部	こども福祉学科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●幼稚園教諭一種免許状</li> <li>●保育士資格</li> <li>●こども音楽療育士</li> <li>●児童厚生一級指導員</li> <li>●社会福祉主事任用資格</li> </ul>
	保育科	<ul style="list-style-type: none"> <li>●保育士資格</li> <li>●幼稚園教諭二種免許状</li> <li>●社会福祉主事任用資格</li> </ul>

# 兵庫大学・兵庫大学短期大学部

## ●学生数

(単位：人)

大学		男	女	計
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	264	122	386
健康科学部	栄養マネジメント学科	58	183	241
	健康システム学科	92	58	150
看護学部	看護学科	57	343	400
生涯福祉学部	社会福祉学科	57	81	138
	こども福祉学科	35	146	181
大学計		563	933	1,496
大学院		男	女	計
大学院	現代ビジネス研究科(修士)	10	0	10
	看護学研究科(修士)	0	3	3
	看護学研究科(博士)	3	9	12
大学院計		13	12	25
短期大学部		男	女	計
保育科	第一部	2	147	149
	第三部	6	234	240
短期大学部計		8	381	389
大学・大学院・短期大学部合計		584	1,326	1,910

※経済情報学部経済情報学科、健康科学部看護学科、経済情報研究科を除く。

## ●卒業生数

(単位：人)

	合計
大学(大学院含)	5,594
短期大学部(専攻科含)	31,053
大学(大学院含)・短期大学部合計	36,647

## ●専任教員数

(単位：人)

大学		教授	准教授	講師	助教	助手	計
現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	10	4	2	0	0	16
健康科学部	栄養マネジメント学科	5	5	3	3	2	18
	健康システム学科	6	3	2	0	0	11
看護学部	看護学科	10	7	6	1	7	31
生涯福祉学部	社会福祉学科	5	2	1	0	0	8
	こども福祉学科	5	4	0	0	0	9
共通教育機構		3	5	0	0	0	8
高等教育研究センター		2	0	0	0	0	2
大学計		46	30	14	4	9	103
大学院 (学部兼務教員含む)		教授	准教授	講師	助教	助手	計
現代ビジネス研究科		10	1	0	0	0	11
看護学研究科		13	3	1	0	0	17
大学院計		23	4	1	0	0	28
短期大学部		教授	准教授	講師	助教	助手	計
保育科第一部・第三部		6	6	4	0	0	16
短期大学部計		6	6	4	0	0	16
大学・大学院・短期大学部合計(職位別)		55	36	18	4	9	
大学・大学院・短期大学部合計(総数)		122					

## ●客員教授

(単位：人)

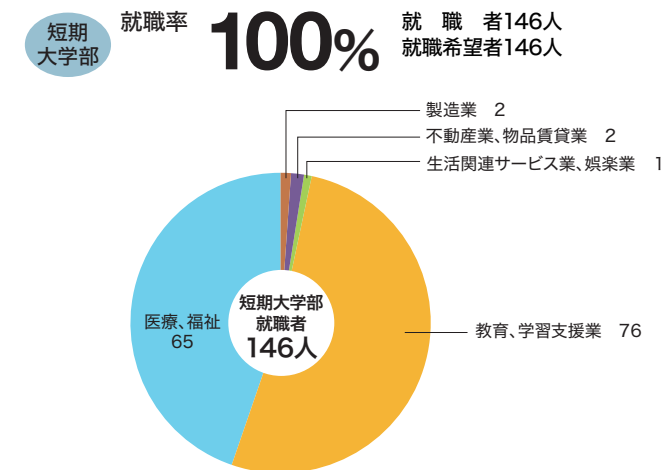
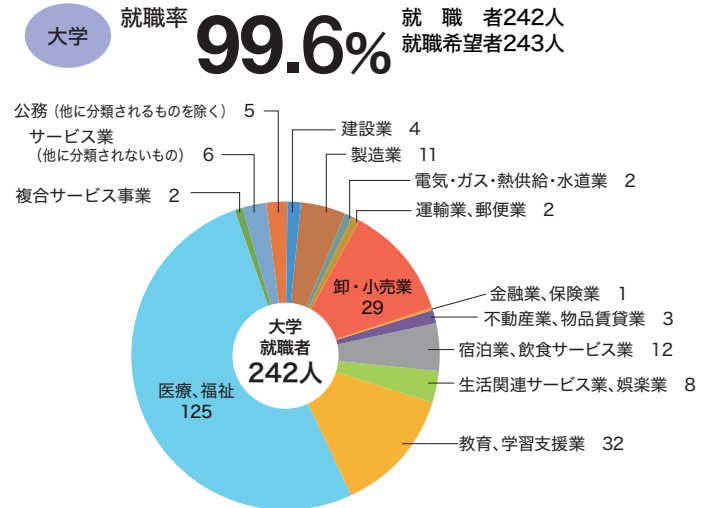
大学院	1	大学	4
-----	---	----	---

## ●専任事務職員数

(単位：人)

大学・短大共通	59
---------	----

## ●令和2年度卒業生 就職状況 (単位：人)



## ●地域別就職状況 (単位：人)

関東	東京都	23
	神奈川県	1
	埼玉県	2
中部	福井県	1
	岐阜県	1
	愛知県	2
	三重県	2
	新潟県	1
関西	京都府	2
	大阪府	35
	兵庫県	308
	奈良県	2
中国	和歌山県	1
	鳥取県	2
	岡山県	2
四国	広島県	1
	愛媛県	1
	香川県	1
合計		388

## ●兵庫県内内訳 (単位：人)

神戸市	73	播磨町	3
姫路市	50	芦屋市	2
加古川市	48	加西市	2
明石市	36	佐用町	2
たつの市	11	川西市	2
高砂市	11	相生市	2
小野市	11	宝塚市	2
三木市	10	宍粟市	1
稲美町	8	新温泉町	1
西宮市	7	神崎町	1
太子町	7	西脇市	1
尼崎市	5	赤穂市	1
伊丹市	3	丹波市	1
洲本市	3	養父市	1
多可町	3		
合計			308

※18・19ページ掲載データは全て令和3(2021)年5月1日現在のものです。



- 福祉関係**
- 社会福祉法人はりま福祉会せりょう園
  - 一般社団法人日の出医療福祉グループ
  - 特定医療法人社団仙齡会
  - 社会福祉法人太子福祉会
  - 社会福祉法人桜谷福祉会
  - 社会福祉法人正久福祉会
- 生涯学習機関**
- 公益財団法人兵庫いきがい創造協会

- 医療関係**
- 医療法人社団東峰会
  - 関西青少年サナトリウム
- 行政機関**
- 兵庫県東播磨県民局
  - 加古川市 高砂市 稲美町
  - 播磨町 明石市 加西市
- スポーツ**
- ASハリマアルビオン株式会社
  - 株式会社トップラン

- NPO**
- NPO法人シミンズシーズ
  - NPO法人 Deep people
- 教育機関**
- |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|
| 兵庫県立加古川南高校 | 兵庫県立神崎高校   | 兵庫県立播磨南高校  | 兵庫県立明石清水高校 |
| 兵庫県立加古川北高校 | 兵庫県立姫路別所高校 | 兵庫県立錦城高校   | 兵庫県立姫路商業高校 |
| 兵庫県立神戸北高校  | 兵庫県立明石南高校  | 兵庫県立高砂南高校  | 神戸野田高校     |
| 兵庫県立東播磨高校  | 兵庫県立高砂高校   | 兵庫県立松陽高校   |            |
| 兵庫県立香寺高校   | 兵庫県立農業高校   | 兵庫県立小野工業高校 |            |

**連携協定 兵庫大学 × 地域**

本学では、活力ある地域の形成及び発展と相互の人材育成に寄与することを目的とし、行政機関、スポーツ関係、福祉関係、教育機関等と連携協定を締結しています。この連携協定を通じ、地域形成および発展に向けた取り組みを推進しています。

- 産業界等**
- 兵庫県商工会連合会
  - 加古川商工会議所
  - 高砂商工会議所
  - 稲美町商工会 播磨町商工会
  - 但陽信用金庫
  - 株式会社加古川ヤマトヤシキ
  - 一般社団法人播磨びとづくりコンソーシアム
- ※令和3(2021)年6月1日現在。

**●本学教員の近刊図書●**

<p>● 考えを深めるための教育原理</p> <p>健康システム学科 古田 薫 ミネルヴァ書房/共著 佐藤光友、奥野浩之 編著 2020年4月発行</p> <p>現場の教員や教職を目指す学生が教育を支える理念や思想、学校教育制度、教育内容やその方法など、教育の原理的な事項にかかわる内容を、子ども・学校・家庭・社会の観点から考察し、考えを深めるためのテキストです。</p>	<p>● 養護学概論</p> <p>— 養護の本質を捉えた実践の創造 —</p> <p>健康システム学科 大平曜子、加藤和代、米野吉則 ジアース教育新社/共著 北口和美、出井梨枝 編著 2020年12月発行</p> <p>「養護の本質を見極めること」、「養護活動の論理的思考を育てること」など養護教諭の学問的意義を念頭に置いた一冊です。</p>
<p>● スピリチュアルケアと教会</p> <p>看護学研究科 窪寺俊之 いのちのことは社/単著 窪寺俊之 2021年1月発行</p> <p>現在、看護学研究科で教員をさせていただいています。今までに病院のチャプレン(病院付き牧師)やキリスト教会の牧師などをしてきました。沢山の方々の死に出会う経験をしてきました。安心して死を迎えるには何が必要かを考えてきました。この本もその一つの成果です。</p>	<p>● 乳児保育I・II</p> <p>— 一人一人の育ちを支える理論と実践 —</p> <p>保育科 石川恵美 嵯峨野書院/共著 石川恵美 編著 2021年4月発行</p> <p>保育士養成課程に基づき、在学中から卒業後まで活用できる内容を網羅しました。乳児保育の理論と実践を学ぶテキストです。</p>

**ありがとうのプロフェッショナルへ。**

～タグライン策定の意義～

このタグラインは、私たち兵庫大学の教育に込めた思いを表現したものです。建学の精神の「和」を大切に、感謝、寛容、互譲の心と高度な技術を併せもった人材の育成を学内外の多くの方々にお約束する内容を表明しています。

～「タグライン」に込める想い～

「ありがとう」に  
あふれる人生を送ってほしい、  
それが私たちの願いです。

あらゆることに感謝の念を抱きながら、  
仕事をさせていただくこと。  
他者にここを寄せ、  
おたがいに認め合い大切にしようこと。  
そして、他者とおたがいに譲りあい、助けあうこと。

すると、やがてあなた自身が  
「ありがとう」という感謝の言葉を  
いただくことができる専門家となります。  
それこそが、私たちが目標とする  
“ありがとうのプロフェッショナル”なのです。  
私たちはあなたの一生を支える力を育みます。

生きる力に変わる学びを、あなたに。

ありがとうのプロフェッショナルへ。

**兵庫大学**

(大学公式サイト)

**読者アンケートのお願い**

今後のよりよい広報誌づくりのため、次のアンケートフォームより皆さまのご意見をお聞かせください。  
<http://www.hyogo-dai.ac.jp/guide/inquiry/vol13.php>

**編集後記**

今回の「和(なごみ)」は「福祉と地域」をテーマに制作を進めてまいりました。さらに、本学をもっと知ってもらいたいとの思いから、本誌の頁数をこれまでの16頁から4頁増やし、20頁で発行しました。紙面をとおして、兵庫大学の想いをお伝えできれば嬉しいです。(Y)

表紙「和」

学園創設者 河野 巖想 書

「以和為貴 篤敬三寶※1」から一字引用

※1 「和を以て貴とし、篤く三宝を敬え」十七  
条憲法には和を大切に、三宝を敬うようにとあります。  
三宝は仏教における仏(覚者)、法(教え)、僧(仏と法を  
大切にする人)の三つの宝です。